

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

2015 年
No. 46

2015年1月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 本橋道昭
© JASE. 2015 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

第13回アジア・オセアニア性科学学会報告……	1
性教育の歴史を尋ねる②……	11
もっと知りたい男子の性⑤……	12

今月のブックガイド……	14
JASEインフォメーション……	15

■第13回アジア・オセアニア性科学学会報告

性科学の知見と臨床・実践をつなぐ国際会議

大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類 教授
アジア・オセアニア性科学連合 役員
WAS 性の権利委員会 委員長

東 優子

■はじめに

2014年10月23日～25日、オーストラリア・ブリスベン市で第13回 AOFS 国際会議が開催され、17カ国から約140名が参集した。AOFSとはアジア・オセアニア性科学連合(Asia-Oceania Federation of Sexology)の略称で、1990年から同会議を隔年開催している。世界には、アジア・オセアニア(AOFS)のほか、アフリカ(AFSHR)、ヨーロッパ(EFS)、南米(FLASSES)、北米(NAFSO)の5大陸に性科学連合が存在し、それらすべてがWAS(World Association for Sexual Health)の加盟団体である。

■極彩色に彩られたブリスベン

美しく紅葉する日本を飛び立ち、降り立った南半球の季節は逆で、オーストラリアに春の訪れを告げる



ジャガランダの紫色の花が満開を迎えていた。もっとも、亜熱帯性気候に属するブリスベン／ゴールドコーストは1年を通して穏やかな気候で晴天率が高く、冬でも日中は半袖で過ごせるほどなのだという。

市の中心部では、翌月に開催されるG20首脳会議(主要19カ国と欧州連合の首脳が集合するサミット)に合わせ、各種イベントの準備が着々と進められていた。滞在2日目には、主要な建物を映像で照らす光と音の祭典「カラー・ミー・ブリスベン(Color Me Brisbane)」が始まり、極彩色に包まれて夜の街を散



光と音の祭典「カラー・ミー・ブリスベン」

歩するという楽しみが増えた。

■ 見栄えよりも中身で勝負

オージー（オーストラリア人の愛称）気質を表現するキーワードは、「のんびり」「気さく」「フレンドリー」「カジュアル」「おおらか（大雑把）」だという。2014年の国際エイズ会議（メルボルン）や2007年のWAS世界会議（シドニー）など、国際会議でオーストラリアを訪れるのはこれが4回目になるが、これまでそれを実感することはなかった。そもそも国際会議というのは、諸外国から来賓が招聘される外交の舞台でもあり、ホスト国は威信をかけて「面構え」を立派に整える。例えば、2004年のAOFSムンバイ大会の会場はインドを代表するタージマハル・ホテルで、コングレスバッグ（配布資料を入れる鞆）は牛革製のアタッシュケース、といった具合である。招待講演者や座長に趣向を凝らした記念品が贈呈される、というのも定番である。しかし、今回ばかりは勝手が違った。

コングレスバッグもなければ、会場設営も最小限で、メルキュール・ホテルには会場であることを知らせる看板類はなく、開会式会場の天井から「第13回AOFS国際会議」の横断幕が吊るされることもなかった。「おおらか（大雑把）」な運営スタイルに戸惑う場面がまったくなかったわけではないが、内容そのものは過去の会議よりもむしろ充実していた感がある。プレジデンシャル・ディナー（会長招宴会）にしても、ありがちな高級レストランに案内されるのではなく、会場はクラング（Jocelyn Klung）接遇委員長の自宅だった。自宅といってもテニスコートとプール付きの



開会式で、先住民アボリジニの歓迎を受ける

豪邸なのだが、堅苦しい挨拶のまったくない雑然とした宴会は、ホームパーティそのものだった。「気さく」で温かいおもてなしが何よりのご馳走で、招待客の笑い声がたえることのない、心に残る夜を過ごした。

「見栄えよりも中身で勝負」のブリスベン大会の日程は、開会式前日に開催された2本のワークショップ（参加費5,000円を別途支払う）とウェルカム・パーティーを除けば、実質3日間である。午前9時から午後5時の間に基調講演、特別シンポジウム、一般演題（口頭発表）などが3会場で同時進行した。参加登録料にはランチが含まれていたため外出する必要もなく、モーニングティーやアフタヌーンティーの時間など、会場内には常に参加者同士が熱心に交流する姿があった。徹底的に「カジュアル」ながら、参加登録料が通常並（もしくはやや高め）の5万円だったのは、オーストラリアの物価高も影響しているのだろう。

■ 性科学の知見と臨床・実践をつなぐプログラム

メルボルン大会の大会長は、第18回WAS世界会議シドニー大会（2007年）の大会長も務めたマーガレット・レデルマン（Margaret Redelman）である。運営組織（ホスト団体）は、1970年代に創設されたオーストラリアの性科学協会SAS（Society of Australian Sexologists）で、2012年まではASSERT National（the Australian Society of Sexuality Educators, Research and Therapists）の名称で活動してきた。

今回のテーマは、「性科学の知見と臨床・実践をつ



(左から) レデルマン大会長、波多野義郎教授 (AOFS 役員)、クラング接遇委員長

なく」(From Podium to Practice) である。直訳すると「ポディウム (演壇・教壇) からプラクティス (実践) へ」となり、韻を踏んでいるところに発案者の工夫を感じる。

大会の特徴を輪郭づける基調講演は、異例の多さともいえる全9本で、以下のような内容だった (※講演タイトルに若干の修正を加えている)。

1. 短小ペニス症候群と醜形恐怖
2. トランスジェンダーと性の健康
3. 婦人科がんの性の諸問題
4. 母性 (出産・育児) とセクシュアリティ
5. マレーシアの女性とセクシュアリティ
6. 肥満がセクシュアリティに与える影響
7. 糖尿病と女性の性機能不全
8. 不妊とセクシュアリティ
9. 軍隊のありようと性の諸問題

ほとんどのテーマが「女性」で、演者のほとんどが医療従事者だった。招聘講演の常として、男性泌尿科医が大会長の時には男性の性機能障害に関する演題が多くなるといったように、大会長の専門性とネットワークが反映されたラインナップになる。今回の大会長であるレデルマンはシドニー在住の一般開業医で、セクシュアル・ヘルス領域のキャリアは30年を超える。得意分野は男女関係や、性にまつわる困難事例であるという。そして、彼女の右腕としてプログラム編成を取り仕切った科学委員長のフォックス (Christopher Fox) は、性機能不全やボディ・イメージに関わる問題を得意分野とし、メルボルンで開業しているセックス・セラピストである。彼は、シドニー大学医学部で「性の健康とカウンセリング」などの



接遇委員長の自宅で催されたアットホームなプレジデンシャル・ディナー (会長招宴会)

授業を担当する大学教員でもある。

オーストラリアには性科学を学ぶことのできる大学院が2つあって、医学大学院であるシドニー大学では、HIV や性感染症を中心とした「性の健康」に関するカリキュラムを履修することができる。一方、コーツ (Rosemary Coates) 前 WAS 会長が在籍するカーチン大学では、性科学 (セクソロジー) で修士の学位を取得することができる。彼女がその基礎をつくったとされるカリキュラムは、より学際性に富んだ内容になっている。共にブリスベン大会の後援団体に名を連ねるシドニー大学とカーチン大学は、いい意味で「ライバル」なのだという。

「メンズ・デー」と「ウィメンズ・デー」

開会式直後の基調講演「多様なペニス：短小ペニス症候群と醜形恐怖」で登壇したのは、WAS 会長のケヴァン・ワイリー (Kevan Wylie) である。英国の



(左から) 今福貴子氏 (日本性科学連合事務局長)、永井敦教授 (川崎医科大学)、小貫大輔教授 (東海大学)



シドニー大学で教鞭をとるフォックス氏（写真左）、オーストラリア初のトランス全国調査を実施したカーチン大学チームのドーティー氏（写真中）とティリー氏（写真右）

シェフィールド大学名誉教授である彼は、2008年にEFS（ヨーロッパ性科学連合）ゴールドメダルを受賞した性医学者で、シドニー大学をはじめ、世界中の大学に客員教授として招聘されている。今回は「短小ペニス症候群」(Small Penis Syndrome) について学ぶ機会が多く、ワイリー WAS 会長が担当したワークショップと基調講演以外にも、一般演題ではフォックス科学委員長が「男性にとって重要なペニスの大きさ」を口演した。

「短小ペニス症候群」というのは、男性が自分のペニスが小さいと思い悩む現象を指す。ペニスの大きさは、時代を問わず、人種や民族、文化の違いを問わず、世の男性たちの関心事であり続けている。ケヴァンが共同研究者と BJU International（英国泌尿器外科学会誌）に投稿した 2007 年の論文の一部は世界中の言語に訳され、インターネット上で紹介されている。この論文は、1942 年以降に発表された論文 50 本以上（世界中のペニス 1 万 2,000 本に関するデータ）を再分析したもので、世の関心はもっぱら「平均値」にあるようである。異性愛の男性が気になると思われる女性たちの反応については、ペニスの大きさではなく、男性のパーソナリティとルックスを重視するという調査結果もあるのだが、男性たちが苦悩を深める複合的要因は様々に存在する。醜形恐怖の域まで追い込まれると、身体変容を試みることもある。講演では、スクリーンいっぱいに「多様なペニス」が映し出され、歴史的概観と短小ペニス症候群を引き起こす社会・文化的要因、さらにはセラピーの実際が紹介され

た。

プログラム・ブックによれば、初日は「メンズ・デー」で、翌日が「ウィメンズ・デー」だという。なるほど、「男性の性の健康に関する最新知見」と「前立腺切除術後の性心理療法」に関するシンポジウムや「早漏に関する最新知見」に関するランチ・セッションなど、男性のセクシュアリティに関するプログラムが集中的に組まれていた。午後の一般演題でも、クリス氏が「ペニスの大きさ」について発表したほか、永井敦教授（川崎医科大学）が「前立腺肥大症患者におけるホルミウムレーザー前立腺核出術（HoLEP）後の性機能の変化」について口演した。

複数のプログラムが同時進行する学会では、すべての会場を回ることはできない。自分の口演（一般演題とシンポジウム）に加えて、学会役員としての仕事を抱えていた私は、翌日の「ウィメンズ・デー」を含め、多くの貴重な口演を聞き逃してしまった。

■ 日本からの参加者と研究発表

今回は、東京大学石丸径一郎研究室からの多くの院生が参加してくれたおかげで、オセアニアを除けば、日本からの参加が一番多かったのではないと思う。

以下に紹介するのは、国籍を問わず、日本に在住する参加者による口演やポスター発表である。紙幅の都合により、発表者名は登壇者のみとし、演題（英文）については意識した。

特別シンポジウム【性の権利宣言】

- ・東優子（WAS 性の権利委員会・委員長）「性の権利と人権：20 年における概念の発達と展開」

一般演題【LGBTIQ】

- ・東優子（大阪府立大学）「トランスジェンダーに関する文献（1990-2013）研究」
- ・大野諒太（東京大学大学院）「両性愛・同性愛の若い男性の性的指向アイデンティティの発達」

一般演題【女性】

- ・大川玲子（千葉医療センター）「千葉性暴力被害支援センター Chissat の取り組み」

一般演題【男性】

- ・永井敦（川崎医科大学）「前立腺核出術（HoLEP）後の性機能の変化」



東京大学の院生たちと大川玲子氏（日本性科学会会長／AOFS 会長 = 当時）

一般演題【カップル】

- ・杜翊寧（東京医療保健大学大学院）「日本におけるレズビアン女性の妊娠阻害要因と医療従事者に求めるケアのニーズ調査」
- ・Dariusz P. Skowronski（セックスセラピスト）「日本における性心理療法の実用的意義」

一般演題【若者】

- ・石川由香里（活水女子大学）「性教育・インターネット・性規範：青少年の性行動に与える影響（第7回 JASE 性行動調査）」
- ・山本ベバリーアン（大阪大学）「性的リスクに対するまなざしの違い：英国における若年母・教師・保健師の比較」

ポスター発表

- ・小貫大輔（東海大学教授）「ブラジルにおけるお産のヒューマニゼーション運動」
- ・中島隆太郎（東京大学大学院）「自己分化と対人問題の関係にみるジェンダー差」
- ・白川さゆり（東京大学大学院）「親の再婚が子どもの性に与える影響」
- ・中澤智恵（東京学芸大学）「若者の性行動に影響する諸要因の分析（第7回 JASE 性行動調査）」
- ・片山皓絵（東京大学大学院）「日本のいじめにみるジェンダー差」
- ・小林良介（東京大学大学院）「嘔吐恐怖症のある人々の SNS コミュニティ利用とジェンダー差」
- ・清水郁子（東京大学大学院）「日本の大学生とジェンダーの平等に対する態度」

■ 若者を対象とした参加助成制度

性科学の裾野を広げていくためには、若者の参加が増えることが重要な課題になるが、とにかく国際会議への参加にはコストがかかり過ぎる。国際社会に存在する奨学金制度はもっぱら発展途上国のみを対象にしたものであるため、日本の若者や NGO 関係者がこれを利用できるということはほとんどない。

そこで AOFS 日本事務局では今回初めて、「参加助成制度」を設け、1) プリスペン大会で研究等の発表予定があること、2) 現在日本国に在住する、年齢 18～35 歳位の者であること、3) 大学等に所属する研究者または NPO 法人等で性の領域に関わる活動を行っている者について、3 人に各 10 万円を支給することにした。

厳選な選考の結果、選出されたのは、「WAS 若者円卓会議」を企画した柳田正芳氏（Link-R 代表／WAS 若者委員会）、大野諒太氏（東京大学大学院石丸研究室）、杜翊寧氏（東京医療保健大学大学院）の 3 名である。

こうした次世代を担う若手には、ぜひ海外に出て、異なる言語で「性」を語り、学ぶ機会に触れて欲しいと思う。異なる言語といっても、英語やスペイン語を使うという話ではない。同じ主題に関する研究でも、日本で当たり前を使う用語と国際社会で使用されている用語では大きく異なることがある。日本を「ガラパゴス化」させないためにも、国際社会の動向を肌身で感じてもらいたいと願っている。



2015 年の第 22 回 WAS 国際会議シンガポール大会での再会を誓う



改訂版「性の権利宣言」に関するシンポジウムで口演した
WAS 前会長コーツ准教授（写真中）と WAS 性の権利委員
会共同委員長を務める筆者（写真左）とパーラネン氏（写真右）

国際会議で言語の違いに触れる

日本社会で定着している専門用語「性同一性障害（GID）」などは、「ガラパゴス化」の代表例である。仕事柄、「なんちゃって通訳」をすることも多いのだが、GID という精神疾患名を口にするのは、日本語を英訳する時ぐらいである。初日午後のダミアン・リグス（Damien Riggs）准教授による基調講演「トランスと性の健康（Trans Issues and Sexual Health）」と午後のシンポジウム「トランス・ピープルの健康とウェルビーイング（The Health and Well-being of Trans People）」においても、「性同一性障害者」に当たる用語が使用されることは、ついぞなかった。

豪州アデレードにあるフリンダー大学でソーシャルワークを教えるリグス准教授は、ジェンダーの多様な若者に対する心理療法を行う臨床家でもある。彼は、「トランスジェンダー」というカテゴリーで把握されている人々に関わるメンタル・ヘルスの専門家には、その多様なありようを理解し、ストレングス・モデルの視点で社会資源やスキルへのアクセスを高めていくことが求められる、と述べた。

また、これに続くシンポジウムでも、オーストラリア初となるトランス全国調査を実施したカーチン大学チームが、多様な当事者の実態を紹介した。さらに行動提案として、GID や GD（性別違和）といった疾患概念の再検討（脱精神病理化）の必要性を訴えた。

ある現象に対する理解が深まることで、新しい言語（用語）が次々と生まれる。情報化社会に生きてい

ば、インターネットでこうしたトレンドを把握することも不可能ではないが、時代の変化を肌感覚で感じられるのが国際会議の醍醐味でもある。

「改訂版・性の権利宣言」

最後に、WAS 特別企画として「改訂版・性の権利宣言」に関するシンポジウムが開催されたことを報告しておきたい。

WAS「性の権利宣言」といえば、1999 年の香港大会総会で採択されたものが有名だが、それを大幅改訂したものが 2014 年 3 月に諮問委員会によって承認された。さらにこのメルボルン大会の開催に合わせて各国語の翻訳版を発表することになり、性の権利委員会の共同委員長である私とフィンランドの性哲学者であるパーラネン氏（Tommi Paalanen）は、会議が始まってなお、翻訳者・監訳者との確認作業に追われることになった。日本語版の監訳についても、実は会議に参加していた山本ベバリーアン教授（大阪大学）、山中京子教授（大阪府立大学）、小貫大輔教授（東海大学）らにお願いした次第である。

シンポジウムでは、私たち 2 人が「性の権利：20 年における概念の発達と展開」と「改訂版のポイント」について解説したほか、WAS 前会長のコーツ准教授（カーティン大学）が「性の権利概念と WHO」について口演した。なお、日本語版を含めた「改訂版・性の権利宣言」は、WAS の公式サイトで全文を入手することができる。

2015 年は、シンガポール

2 日目夜には AOFS 理事会・総会があり、第 14 回 AOFS 国際会議が韓国で 2016 年 3 月 31 日～4 月 3 日に開催されることが改めて確認された。その前に、第 22 回 WAS 国際会議シンガポール大会（2015 年 7 月 25 日～28 日）が控えている。

演題申込はすでに始まっており、3 月 31 日に締め切られる。参加登録料が割引となる団体登録や団体旅行に関する案内はまだ先のことになるが、この『現代性教育研究ジャーナル』に掲載されるはずである。この報告書を読んで、少しでも関心を持ってくださる方が増えれば、こんな嬉しいことはない。